

# かながわ畜産まめ知識

## 乳用牛が食べる草づくり

### 乳用牛が食べる草を栽培する

牛が食べるエサは大きく2つに分かれます。一つはとうもろこしや大豆、ムギなどの穀類でデンプン質が多く、エネルギーの高い「濃厚飼料」といわれているもの、他の一つは繊維質の多い草類で「粗飼料」といわれているもので、どちらも牛にとっては必要なものです。濃厚飼料の多くは輸入にたよっていますが、粗飼料は農家自らが栽培（自給）が可能な部分です。しかし、県内では必要量の一部しか栽培されていません。なお、酪農家は、生産にかかるコストダウンのために少しでも多く自給飼料を作ろうと励んでいます。

※原油価格の上昇に伴って、平成20年10月期の配合飼料価格は平成18年7月期より1.5倍以上に高騰。



### 主な飼料用作物の種類や栽培面積

県内では610ha（H19年統計、平塚市の面積よりやや少ないくらい）の飼料畑作付面積があります。このように、飼料畑は県の農地・緑地の保全にも貢献しているといえます。

飼料畑作付面積の内訳は、飼料用とうもろこしが約58%と最も多く、33%余りがイタリアンライグラスなどイネ科の牧草などです。

この飼料用とうもろこしは、人が食べる品種のものよりもずっと背丈が高く約2mにもなり、実だけでなく、葉や茎も全て利用するため1反（約1,000㎡）当たり4～6トンの収穫があります。（参考：飼料用とうもろこしの実は人が食べても美味しくありません）

### 土と家畜・食物の連鎖

自給飼料生産に使われる肥料は、一般に家畜ふんたい肥が使われます。このように家畜ふんはたい肥として土に戻され、そこで育った草が牛に食べられ、牛乳や肉となるという循環が成り立っています。物質循環が、まさに命の連鎖ともなっているわけです。

### 乾草とサイレージ

収穫された草はそのまま生で牛に与えることもできますが、それでは草の生育中の短期間しか利用できません。このため、収穫した草を密封して（空気を遮断）乳酸発酵（漬物状態）させ、保存性を高め、年間を通じて牛の飼料として利用できるようにします。これを「サイレージ」といいます。

コンクリートや鉄板などで作った槽につめ、密封するなどの方法もとられていますが、右の写真に示したものは新しい機械化システムです。

トラクターで刈り取った草を、けん引した機械でロール状にして、これを写真のようにビニールフィルムでラップすることで空気を遮断して「ラップサイレージ」にします。少ない労働力で省力的にサイレージが作成できるため、大変期待されている技術です。

### 牧草地で飼うイメージがある？



酪農というと放牧地で草をはむ乳用牛のイメージがあるかもしれませんが、残念ながら地価の高い神奈川県ではそのような経営はほとんどありません。牛は牛舎で飼われ、運動場としてパドックを併設している経営が主体です。

エサは牛舎で与えるので、ここで言う飼料畑とは放牧場ではなく飼料用作物を育てる「畑」の事です。

### サイレージ作りの技術



飼料用とうもろこし刈り取り作業  
（機械後方にロール状の草を放出）



ラッピングマシンのようす



ラップサイレージ